

メッセージアウトライン 創世記21:1～21「イサクの誕生」

[1-2]「主は約束したとおりに、サラを顧みられた。主は告げたとおりに、サラのために行われた。サラは身ごもり、神がアブラハムに告げられたその時期に、年老いたアブラハムに男の子を産んだ」

アブラハムの妻サラは主の約束されたとおりの時期に男の子を産んだ。(18:14) サラはこの時九十歳、アブラハムは百歳であった。(5) これはまさに主なる神による超自然的なみわざである。そして主がアブラハムと結ばれた祝福の契約は、その子イサクへと受け継がれていくのである。

[3-5]「アブラハムは、自分に生まれた子、サラが自分に産んだ子をイサクと名づけた。そしてアブラハムは、神が命じられたとおりに、生後八日になった自分の子イサクに割礼を施した。アブラハムは、その子イサクが彼に生まれたとき、百歳であった」

「イサク」彼は笑うの意。これは創世記17:19であらかじめ主から告げられていた名前である。これは子が生まれることを聞いた時のアブラハムとサラの不信仰な笑い(17:17,18:12) とそれでもなお実現した神のみわざを記念するような名前である。「八日目の割礼」…男子の性器の皮の一部を切り取る。これは神と契約を結んだ民としての契約のしるしとなる。アブラハムの子孫であるイスラエル民族はみなこの割礼を受ける。「百歳であった」とあえてアブラハムの年齢が書かれているのは、イスラエル民族の起源が、何よりも神の干渉によってのみ可能であったことの強調である。

[6-7]「神は私に笑いを下さいました」サラは神のみがなしうる大いなるみわざのゆえに、今は喜びの笑い、感謝の笑いを経験しているのである。「これを聞く人もみな、私のことで笑うでしょう」これはあざけりの笑いではなく、サラの喜びをともに喜んでくれるという意味。「だれがアブラハムに、『サラが子に乳を飲ませる』と告げたでしょう。ところが私は、主人が年老いてから子を産んだのです」あり得ないことが、この私に起こったと、喜び興奮する彼女の気持ちが伝わってくるようである。

[8]「その子は育って乳離れした。アブラハムはイサクの乳離れの日、盛大な宴会を催した」

これはイサクの二、三才の頃か。この宴会はアブラハムの族長としての勢力にふさわしく、飲んだり、食べたり、歌ったり、踊ったりの盛大なものであった。

[9] その時に一つの事件が起こる。「サラは、エジプトの女ハガルがアブラハムに産んだ子が、イサクをからかっているのを見た」 創世記16:16でイシュマエルが生まれた時。アブラハムは八十六歳であった。百歳の時にイサクが生まれ、乳離れしたのが二歳であったとしても、この時イシュマエルは十六歳くらいであったことになる。その子が幼いイサクをからかっているのを見たサラは怒りに燃えた。

[10]「それで、アブラハムに言った。『この女奴隷とその子を追い出してください。この

女奴隷の子は、私の子イサクとともに跡取りになるべきではないのですから』」

非常に感情的なサラの発言である。本来イシュマエルもアブラハムの子であるので跡取りとなる権利はある。もともとはサラの発案でハガルによって跡取りとしての子をもうけさせたのである。それゆえサラのこの発言は彼女自身のこれまでの行動との矛盾であり、またそれだけに彼女の心の乱れ、動揺というものが感じられる。この発言の根底にあるのは、わが子可愛さであったであろう。

[11]「このことで、アブラハムは非常に苦しんだ。……」ここには、自分の子イシュマエルを追い出すことが正しいことは思われなかつたの思いがあつたであろう。

[12-13]「神はアブラハムに仰せられた。『その少年とあなたの女奴隷のことで苦しんではならない。サラがあなたに言うことはみな、言うとおりに聞き入れなさい。というのは、イサクにあって、あなたの子孫が起こされるからだ。しかし、あの女奴隷の子も、わたしは一つの国民とする。彼も、あなたの子孫なのだから。』」

これはサラの言うことが正しくて、アブラハムが間違っているからと理解するべきではない。神はイサクを選びの中に定められておられることをここで改めて告げられたのである。（一回目は17:19）

それゆえ、アブラハムは形としてはサラのことばに従うが、それは妻に引きずられる夫の弱さのゆえではなく、神の約束のゆえであつた。13節では17:20のイシュマエルに関する約束が再確認されている。これはアブラハムにとって大きな慰めであつただろう。「彼も、あなたの子孫なのだから」イシュマエルは直接神の選びの系列ではないにもかかわらず、神とアブラハムとの契約のつながりの中に置かれていることを強調していると思われる。

[14-16]「翌朝早く、アブラハムは、パンと、水の皮袋を取ってハガルに与え、彼女の肩に担がせ、その子とともに彼女を送り出した。それで彼女は行ってベエル・シェバの荒野をさまよつた。皮袋の水が尽きると、彼女はその子を一本の灌木の下に放り出し、自分は、弓で届くぐらい離れた向こうに行つて座つた。『あの子が死ぬのを見たくない』と思つたからである。彼女は向こうに座り、声を上げて泣いた」

「弓で届くぐらい離れた向こう」これはヘブル語独特の表現方法で、目の届くところで、しかも徐々に死んでいく苦しみを見ないでもすむ所という意味。彼女はもうどうしようもなく、ただ声を上げて泣くのみであつた。

[17-18]「神は少年の声を聞かれ……」ハガルだけでなくイシュマエルも渴きと疲れで薄れゆく意識の中で、助けを叫んでいたのであろう。旧約はアブラハムの子孫であるイスラエル民族の歴史を軸として書かれているが、しかし、他の民族や国民はみなさばかれ、滅びるべきものとして書かれているかというところではない。神はすべての人が救われることを望んでおられるのであり、そのためにご自分の契約の民イスラエル民族を通してご自分を啓示され、救い主イエス・キリストをこの世に來たらせ、救いの福音を全世界に宣べ伝えようとされているのである。→Ⅰテモテ2:4,Ⅱペテロ3:9 それゆえ、イス

ラエル民族だけ救われれば、後はどうでもよいというのは神のみこころではない。現に私たち日本人も、また世界中の民も神の恵みのうちに救いに入れられるものとされている。

「わたしは、あの子を大いなる国民とする」(18) 神はイサクだけでなく、イシュマエルのこともご自身の計画のうちに入れてくださるのである。

[19]「神がハガルの目を開かれたので、彼女は井戸を見つけた。それで、行って皮袋を水で満たし、少年に飲ませた」

彼女は絶望していた時に気がつかなかった井戸の存在に気づかされた。私たちも神のことばによって慰め、励まし、希望が与えられる時、それまで気がつかなかった解決策や脱出の道を見い出すことがある。私たちは不信仰になって絶望しないで、神の約束、神が与えてくださるみことばに信頼して生きる者とならなければならない。

[20-21]「神が少年とともにおられたので、彼は成長し、荒野に住んで、弓を射る者となった。彼はパランの荒野に住んだ。彼の母は、エジプトの地から彼のために妻を迎えた」

神がともにおられるということこそ、すべての祝福の土台となる。荒野での生活は簡単なものではなかったであろう。しかし、そこで彼らはたくましく生き抜くことができた。神がともにいてくださればどのような困難にも道が開かれるのである。

「パランの荒野」シナイ半島中部からカナンの地にかけて広がる荒野。彼の母はエジプトの地からイシュマエルのために妻を迎えた。彼の母ハガルの出身地はエジプトであったので、このことは当然であったかもしれないが、これはイシュマエルがさらに異教の世界に近づいて、神がアブラハムと結ばれた契約の系列からは遠ざかることを意味する。イシュマエルは今日のアラブ民族の祖先の一人とされている。

18節で神はイシュマエルを大いなる国民とすると言われたが、それは地上的にアラブ民族が増え広がって大いなる勢力を持つようになるということではなく、神の摂理のうちに救いの御計画に組み込まれて大いなる国民となるという意味であろう。

神は約束を必ず成就されるお方である。九十歳のサラにイサクが生まれた。サラはハガルとイシュマエルを追い出したが、しかし神はイシュマエルをもかえりみて、彼がアブラハムのもとを離れ、荒野に住んでも、ともにいてくださり、守り支え、力づけてくださり、大いなる国民とするとの約束も与えられた。アブラハム、サラ、ハガル、イシュマエル それぞれ弱さがあり、間違いも犯すが、しかし、神はそのような人間の失敗や弱さを通してなお、そこで働かれ、ご自身のみこころを成し遂げられるのである。私たちも様々な弱さがあり、多くの誤りや失敗を犯すが、しかし、神はそれらすべてをご存じで、すべてのことをともに働かせて益としてくださり、間違いなくみこころを成し遂げられるのである。そして、この神はそのひとり子イエス・キリストを私たちのためにお与えになるほど私たちを愛してくださるのである。このお方を私たちは心から信じて、失敗や弱さもあるがままゆだねて、みこころに従うものとなっていきたい。

→エレミヤ29:11、ローマ8:28